



国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2010.4
No.9

テキスト布置の解釈学的研究と教育

CONTENTS

- 祝辞 佐藤彰一教授 歴史家の横顔 …… 02
グローバルCOE論文賞 …… 03
大学院学生海外派遣事業調査報告 …… 04
教育プログラム 2009年度講義科目の紹介 …… 05
研究活動 グローバルCOE講演会 …… 07
オープン・レクチャー …… 08
グローバルCOE研究員ブリーフィング …… 10
海外出張報告 …… 11
Report & Information …… 12



祝辞

2009年12月14日、名古屋大学グローバルCOEプログラムの拠点リーダーである佐藤彰一特任教授が、日本学士院の新会員に選出されたことは、『GCOE Newsletter No.8』でお伝えしましたが、海外からの祝辞が寄せられましたので、ここに紹介します。

ピエール・トゥベール氏

Pierre TOUBERT

コレージュ・ド・フランス名誉教授/フランス学士院会員(碑文・文芸アカデミー)



佐藤彰一教授 歴史家の横顔

佐藤彰一教授が名声ある「日本学士院」の会員に選定されたという知らせは、西欧の同僚や友人にとっても大きな喜びをもたらしました。彼らがこの出来事に、佐藤教授がなしてきた特別な功績の承認を見たのは正当であり、ここで私は、われわれの満足に十分な根拠があることを証言したく存じます。

実際、佐藤彰一教授が、ヨーロッパで最もよく知られた西洋中世史の専門家であることに疑念を挟む余地はありません。佐藤教授はとりわけフランスの中世初期史(5-11世紀)を研究領域としていますが、イギリスやドイツやアメリカの大学とも活発な交流を保っています。私は、エクサン=プロヴァンス大学やプリンストン大学、われわれの二つの高等研究院(社会科学高等研究院と歴史学・文献学部門を擁するソルボンヌの高等研究院)において、「招聘教授」の資格で佐藤教授が行った教育が大きな反響をもたらしたことを想起したく存じます。加えて、稀有な栄誉として、2001年にはコレージュ・ド・フランスの国際講座に任命されました。私の知るかぎり、佐藤教授は中世初期フランスについて講義を行うためにフランスの最高学府によって招待された最初の日本人識者です。大成功を収めたその講義は、私にとってとても良い思い出となっています。

私はここで短く触れることしかできませんが、これらの栄誉は佐藤教授が早くも1970年代から最初はカンで、続いてパリで受けた専門教育に始まり、西ヨーロッパ、とくにフランスで行ってきた研究滞在を飾ることになりました。かくして私は、多彩かつ内容豊かな学術作品、日本の歴史学が作りだす風景の中で、その堅固な方法論と獨創性において異彩を放つ仕事がある特別な価値に触れる機会を与えられたのです。

この新たな学士院会員の学問的業績が示す最初のオリジナルな特徴は、とくに重要な研究領域である中世初期トゥレーヌ地方の歴史を、見事な腕前で掘り取っているところに由来します。メロヴィング朝期フランスの歴史にとってきわめて重要なこの地方は、利用可能な史料の豊かさ、すなわち会計文書、経済史の史料、トゥールのグレゴリウスのような第一級の叙述史料・聖人伝史料の存在によって際

だちます。佐藤教授は、このような歴史研究の戦場におい

て、テキスト史料の批判的研究をわがものとし、そこから卓抜した総合的な地域史の記述を引き出すことのできる力量を示したのです。

第2のオリジナルな特徴を述べましょう。しばしばありがちなこととは反して、佐藤氏は最初を選んだ研究領域に閉じこもることなく、研究の公表を通じて、ヨーロッパ中世学について、また長期的な時間幅で捉えることによって、とりわけフランス史について広大な展望を開くべく努めてきました。この点に関して、彼が著したいくつかの作品は、優れて炯眼な日本の読者に、西洋中世史全般について最良の解説を与えてくれていると言っても大げさではないように私には思われます。著しく要求度が高く、批判精神に満ちた学殖の世界のみならず、きわめて広範な総合の領域をも自由に駆け回る佐藤教授は、非の打ちどころのない西洋中世史家と見なしうるように思われるのです。

最後の、しかし軽んじられるべきではないオリジナルな特徴を、はっきりと述べておかなければならないように思います。すなわち、佐藤教授が、修得した中世史研究を基盤として学際的な共同研究を引きおこし、そこに活気を与えるのに優れた資質を有していたことです。こうした共同研究によって、様々の分野の専門家たちが自分たちの経験から得た知識を突き合わせ、大いに期待の持てる獨創性を備えた壮大なプログラムの発展に活かすことが可能になりました。このプログラムとは、(狭義の)歴史テキスト、法テキスト、制度に関わるテキストや(言語学的であると同時に美学的な観点から見た)文学テキストを包摂するテキスト科学のことです。その主唱者により正当にも「テキストの生成と解釈」と特徴づけられたこのアプローチは、まさに日本において、実り豊かな共同研究を引きおこし、方法論的にきわめて有益な成果をもたらすのに貢献しました。

時代を画する諸作の発表に彩られた、このような知的な歩みこそが際だっているものであり、まさしく西欧の同僚たちによってそのように認知されているのだと私には思われます。それゆえ彼らは、これほどの国際的な名声に浴する知識人が「日本学士院」の会員に選定されたことを心の底から喜んでいるのです。

(訳:加納修)

G I O B A I C O E
グローバルCOE論文賞
 2009年度第2回

グローバル COE 論文賞に応募いただきありがとうございました。
 選考委員会での審議の結果、次の論文を顕彰することになりましたので発表し
 ます（順不同）。また、両論文に対する授賞式と副賞の贈呈式は4月7日、グロー
 バル COE プログラム大学院説明会に先立って行いました。

笠井俊和（博士課程後期課程3年）

English Smuggling Activities in the Official and Private Documents: The “Spanish Trade” and the Logwood Trade from Jamaica in the Late Seventeenth and Early Eighteenth Centuries



【講評】 笠井論文は17世紀後半から18世紀前半にかけての、スペイン領ジャマイカを舞台とする、染料となるログウッドの英国側の密貿易の様相を解明しようとした研究である。1670年のマドリッド条約により、英国とスペインは自国の商船に

無許可の新世界での交易を禁じたが、禁令は名ばかりで、密貿易は止むことがなく、英国側では全貿易量の75パーセント以上が、公式の記録には痕跡のない非合法の取引であったと想定する研究者もいる。論者は、新大陸の英領主要港に配置された海軍の出先機関が作成した Naval Office

Shipping Lists に記載されている延べ5000隻の船舶データについて、テキスト論的な考察を加え、ヌアラ・ザヘディの所説を基礎に、入港記録がありながら、出港の際の記録が欠けている船舶は、違法にスペイン領西インド諸島との取引に向ったのだと想定する。もともと密貿易という行為の性格上、密輸船の記録は公式の貿易船舶リストには記載されない。著者は非公式でありながら、より直接の記録である船乗りの日記や手紙などの私的な性格の文書を活用して、ジャマイカを舞台にした近世から近代にかけての植民地経済史の重要な局面を、丹念な資料蒐集と、分析の工夫を凝らして、描き出すことに成功している。

佐藤彰一（グローバル COE 拠点リーダー）

エミリ・ボルドナヴ（博士課程後期課程1年）

Japonisme, de l'art à la littérature : Pour une présentation des concepts et phénomènes d'influence



【講評】 本論文は、19世紀後半のフランスにおいてジャポニズムと呼ばれた文化現象を取り上げ、従来美術史学の領域を中心に行われていた研究と一線を画し、フランス文学との関わりにおいてジャポニズムを再検討し、日本芸術がフランス美術および文学に与えた影響という観点から、その文化的コンテクストと形式論的特徴について論究したものである。論者は、19世紀中葉において詩人ボードレールが示唆した総合芸術という理念を実現する過程の中でジャポニズムがフランスにおいて受容・解釈されてきたとの仮説を提示した後、19世紀後半のフランス美術・文学における閉塞状

況を指摘する。その上で、Jing-Lar などのような画家と文学者との個人的なコミュニティの存在を指摘し、芸術家だけに限らず文学者達もまたジャポニズムに形式論的な影響を受けたことを、象徴主義や高踏派の詩人達の創作、ゴンクール兄弟の Manette Salomon におけるパリ描写などを例に取りながら論証している。個々の文学作品に対する踏み込んだ分析は必ずしも十分とはいえないが、文化的コンテクストについては画家や作家間の交友関係を丹念に追うとともにフランス文学に与えた形式論的影響についても、散文・韻文を問わず例を挙げて論証している点は評価できる。今後より詳細に資料収集と作品分析を進めることで、研究を深めていくことが期待される。

重見晋也（グローバル COE 技術統括責任者）



2009年度 大学院学生海外派遣事業調査報告 第1回

グローバルCOEでは、「大学院学生海外派遣事業」の募集を年2回行い、博士課程後期課程の学生に対して、課程博士論文の執筆に必要な海外での調査を支援しています。募集に際して博士論文執筆計画および海外調査計画を提出してもらい、グローバルCOE学術委員会の下に設けられた選考委員会で応募書類を審査し、さらに面接を実施して支援する海外調査を決定しています。2009年度の第1回目の募集で採用された山下さんの報告書を以下に掲載します。

フローベールの怪物性の解釈に関する文献及び草稿の調査

フランス

山下英夫 ● 文学研究科 フランス文学 博士課程後期課程2年

グローバルCOEの海外派遣プログラムで2月4日から3月16日まで渡仏し、博士論文のテーマであるフローベールの怪物性の解釈に関する調査及び資料収集をする機会が与えられた。

派遣先は国立図書館フランソワ・ミッテラン館とリシュリュエ館である。

フランソワ・ミッテラン館ではロマン主義に関する文献調査を行った。指導教官より、日本ではロマン主義の孕む怪物性を扱った文献が乏しいことからそれに関する資料収集にあたるよう指導を受けていたので、ジョルジュ・ギュスドルフ (Georges Gusdorf) の浩瀚な論文、*Dieu, la nature, l'homme au siècle des lumieres*、*Du neant a Dieu dans le savoir romantique*、*L'homme romantique*、そして *Le savoir romantique de la nature* を参照し、怪物性が「グロテスクに対して過剰」なものであるという点に留意し読み解いていった。そして重要と思われるところはコピーを取った。これらの論文では、『ボヴァリー夫人』の中に

描かれる近代人と対照的なエマの怪物性をなすロマン主義的傾向が科学的、歴史的、宗教・哲学的に考察されており、フローベールの描いた一時代の習俗における近代とロマン主義の持つ相対的な怪物性を解釈学的に多方面から検討するための資料が多数収集できた。



また、リシュリュエ館はフローベールの初期作品の草稿をほぼ完全に保管しており、それらのマイクロフィルムを閲覧し、今までになされた研究の実証を試みた。多くの初期作品においてフローベールは「宿命」を非情な怪物(=神)ととらえているが、その怪物である宿命が如何に構想され、作品に組み込まれていくのか *Un parfum a sentir ou les Baladins*、*La Peste a Florence*、そして *Rage et impuissance* を対象に調査した。同様にサタンが象徴する「永遠」や、「深淵」、「死」の観念については *La Danse des morts* の、また後年『ボヴァリー夫人』で扱われる汎神論的自然と近代が生み出した怪物(ブルジョワ)の原型であると考えられる、個々の怪物として描かれた魂と肉体についても、それらの背反が何を意味するのか *Reve d'enfer* の草稿で調査した。以上の調査から生成過程が明らかになっただけでなく、抹消された箇所や書き込みから決定稿では読み取ることのできないデータを収集することができ、フローベールの怪物性の解明への手がかりとすることができた。

両国立図書館で収集したこれらの資料を総括的に分析し、博士論文の執筆に反映させていきたい。



講義科目の紹介

グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」では、「テキスト布置解釈学原論」と「テキスト布置解釈学各論Ⅰ～Ⅶ」および「テキスト布置解釈学概論」を開講し、2008年度博士課程後期課程入学者から各2単位の修得を義務化しています。ここでは2009年度後期に開講した授業の内容を紹介しています。また、グローバルCOEプログラム授業科目の履修は、「グローバルCOE論文賞」および「大学院学生海外派遣制度」に応募する際の条件となっています。

テキスト布置解釈学原論 [後期]

2010年1月7日(困)–10日(回)

松澤和宏 教授(フランス文学)

テキスト布置の解釈学を素描するにあたって、まず最初に21世紀COEプログラムの統合テキスト科学の探究のなかからこの解釈学が誕生した経緯について振り返った。ヤコブソンの有名なコミュニケーション図式におけるメッセージやコードといった概念の批判的検討を通して、テキスト布置という重層的な構造やコミュニケーションの主体が文化的コンテキストのなかに身を置いているだけではなく、そもそも主体として存在するためには、諸々の〈先入見〉にあらかじめ先導されていること、さらにテキストの

還元不可能な二重性をガダマー的〈対話〉論の紹介やバルトやデリダのテキスト論の批判的吟味を通して明らかにした。ついで、ガダマーが自然科学の機械論的パラダイムに教養や共通感覚、趣味判断などの人文主義的伝統を対置することを通して、解釈学を錬磨していった歴史的意義を確認した。講義の後半では、権威と理性、先入見とイデオロギー、伝統と近代主義との関係についても様々な角度から検討を加えた。出席した院生諸君と実り豊かな〈対話〉が成立したことを嬉しく思う。

テキスト布置解釈学各論

各論

佐藤彰一 ● “In Quest of Identification of a Medieval Religious Manuscript : Textual Configuration of Vatican Ottoboni Latin no.163.”

At the outset of my class, I explained how should I carry out the class of this specified study of “Hermeneutic Study and Education for Textual configuration”, in the second semestral term in 2009. I illustrated, also, an academic background of my inquiries on the Vatican manuscript, Ottoboni latin, no.163. After these preliminary observations I, rather we, launched on the reading of the manuscript which was a martyrology of unidentified origin and certainly belonged to the 14th century,

according to the handwriting. As our experience has been very limited as to reading of manuscript written in the later Middle Ages, our progress upon reading this martyrs' calendar has been made slowly in the class. On the final stage of the term, we arrived at on the 31st December. Only eight days of entire itinerary were absorbed! Because the calendar begins on the 24th in December. All through our reading and inquiries in the class, however, we got a pair of clues that might permit us to identify the origin of this manuscript. I finished my class in that term, with my reflections upon the configurative value of the martyrological text.

各論

釘貫 亨 ● 能動態と受動態が対応する西洋語のヴォイスと異なって、日本語は、受動態と能動態が対応せず、受動態(受け身)と使役(レル・ラレル：セル・サセル)が意味上、形態上対応し、その間に自動詞と他動詞の対立が介入するという独自のヴォイスの体系を備えている。かかるシンメトリカルな対応は、平安時代以後歴史的に成立した。現代語のレル・ラレル、セル・サセルは、平安時代語のル・ラル、ス・サスの後継形態であり、それぞれ古代語の「寄る

自一寄す他、移る自一移す他」などの自動詞語尾ル、他動詞語尾スに類推して成立した。日本語の受動態形式は、自動詞に類推して発達してきたので、意味の中核は受動にはなく、自発である。さらに日本語の受動態構文には、無生物のモノを主語に取らず、話し手や動作主の被害、迷惑を専ら表示するという特徴的な制約があった。

古典日本語には、キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リなどテンス・アスペクトを細かく表示する現代語にないシステムが

存在した。中でもタリトリは、奈良時代に名詞修飾に突出した機能を発揮して登場した。タリは、「枯れたる木、荒れたる都、瘦せたる女」などの過去分詞的用法に排他的な造語力を発揮した。奈良時代語における過去分詞的用法の資源は、上代語の受け身助辞ユ・ラユの機能の貧弱さによって自動詞に偏っていた。タリが介入する過去分詞的用法は、平安時代以後も増強し、新たな受け身助辞ル・ラルを

加えて他動詞を自動詞に転換する過去分詞的用法（「建てられたる御堂、繕はれたる水」など）が発達してテンス・アスペクト表示の活用助辞の中でタリの文法的機能が突出した。この事実は、中世以後、テンス・アスペクト表示形式の再編が行われ、タリだけが残存して、今日のタ（ダ）一極に収束した事態に関与した可能性があると見られる。

各論

V

重見晋也 ● 本講義では、テキストの存在様態について、テキスト布置の観点から哲学および文学分野における先行研究に遡って検討し、テキスト布置解釈学の基幹をなす基礎的な考察を行うことを目的としていた。主として取り上げた先行研究には、ミシェル・フーコーの『知の考古学』、ポール・リクルの『時間と物語』、ジェラルド・ジュネットの『パランプセスト』およびナラトロジー理論、ハンス＝ゲオルグ・ガダマーの『真理と探究』であった。フーコーにおいては、「ディスクール／エノンセ」の区別を基礎として1つ1つの「エノンセ」の集合総体として「ディスクール」が定義づけられており、テキストとしての存在様態は「ディスクール」の存在様態に等価なものとして考察されていることを確認した上で、「ディスクール／エノンセ」概念にはテキスト布置の構成要素を客観的に基礎づけるための考察が欠如していることを指摘した。

次にプラトンの『国家』にまでさかのぼってナラトロジー研究におけるテキスト要素の考察を概観した上で、ジュネットの『パランプセスト』で与えられるテキスト布置の構成要素の定義を考察した。これら文学的なアプローチに

よるテキスト布置に関わる研究においては、テキスト現象に立脚した包括的なテキスト布置概念の構築に至っていないことを指摘した。

リクルの『時間と物語』においては、独自のミメシス過程の考察の中で、3層に重層化した3つのミメシス段階が作者から読者へのコミュニケーション過程において、作者から発せられたテキストが線状的に処理されていくとされていたが、こうした考え方ではテキストの持つ意味の重層化という側面は説明できる反面、個々のミメシス過程の役割がしばしば曖昧になっているという問題点を指摘した。ガダマーについてはあまり時間を割かなかったが、テキストの内的要請が重視され、主観主義的な相対主義を回避するような、イデア的存在としてのテキストが前提となっていることを確認するにとどまった。以上の考察から、テキスト布置に関して、非相対主義的な側面をテキスト構造あるいは理解プロセスとして基礎付け、それらがコミュニケーション過程の中でどのような役割を持つのかについて、個々の研究領域ごとに個別具体的な研究を進めることが肝要であるとの結論を提示した。

各論

VI

ゼーン・ゴベル ● 本講座では、テキスト布置の解釈学的研究から得られる知見を、国際的な状況における英語による研究発表へと応用した。とりわけ、大学院生がテキスト間の幾つかの関係を理解する手助けをする一方で、彼らにそれらの理解を自らの研究の準備と口頭発表を通して応用する機会を与えた。授業では2つの主要なテキスト間関係を検討した。一つは、学生自身の学問的背景から来る前テキスト（つまり自らが専攻する分野における理論や方法論に関する知識）とメタテキスト（つまり、研究上の疑問への適用を介した、それら前テキストに対する自らの解釈）の間の関係である。もう一つは、これらのメタテクス

トがパラテキストあるいはジャンルとして表現され得る方法に関するものである。例えば、パラテキストは要約、研究報告書、雑誌論文、学術書、学会発表等の形を取り得る。学生は次に解釈学的テキスト布置に関する理解を、自らの分野における研究上の基礎（つまり前テキスト）を検討することで応用した。この過程を経ることは、学生が学問的な知識の基礎にある隙間を見つけ出す助けとなった一方で、そのような知識の基礎を解釈することにも寄与した。つまり、自らの現在の研究計画の口頭発表という形のパラテキストとして次いで再文脈化したメタテキストを形成することである。

h グローバル COE 講演会

The 'Life of St Willfrid's' account of Wilfrid on the Continent. Should we believe it?

『ウィルフリッド伝』にみる、ウィルフリッドによる大陸の記述。われわれはそれを信じるか

ポール・フォーエーカー 教授 (マンチェスター大学歴史学部長)

2010年1月20日 13時30分—15時30分

1953年生まれのポール・フォーエーカー教授は、オックスフォード大学を卒業後、ロンドン大学で博士号を取得し、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ講師職を経て、現在マンチェスター大学の歴史学部長職にある。共著に『後期メロヴィング期フランス 歴史と聖人伝』(1996年)、単著に『カール・マルテルの時代』(2000年)、編著に『新ケンブリッジ版中世史』第1巻(2005年)がある。いまや英語圏におけるメロヴィング朝研究をリードする人物である。

講演の題目は、『『ウィルフリッド伝』にみる、ウィルフリッドによる大陸の記述。われわれはそれを信じるか』である。イングランド出身のウィルフリッドは、ノーサンブリアの司教にしてリボン修道院長であった。709年に彼



がこの世を去った後、ほどなくまとめられた『ウィルフリッド伝』は、ウィルフリッドの三度にわたるローマ訪問を記録しているという点で、メロヴィング朝研究には欠かせない史料である。しかしながら、聖人伝という史料の性格上、そこに記



された記述で語られる歴史的事実は、慎重に検討したうえで利用しなければならない。フォーエーカー教授は、『ウィルフリッド伝』とは別の経路で同時代の情報を収集した大陸側の史料、『アウネムンドの事績』の記述内容と比較することにより、『ウィルフリッド伝』の記述の真偽を問うた。

講演は、テキスト伝承や発掘記録も含めた最新のメロヴィング朝研究の一端であり、極めて専門性の高い内容であった。それは文献学的また歴史学的に意義深いものであると同時に、本プログラムの主幹テーマたるテキスト論にも裨益するところの大きい議論であった。

(文責：小澤 実)

Cultural interaction between East and West

東洋と西洋の文化交流

黄一農 教授 (台湾国立清華大学)

2010年2月23日 15時—17時10分

本年度、台湾国立清華大学人文社会学院と名古屋大学大学院文学研究科との間に博士課程後期課程を中心とした学術交流協定が締結されたことを記念し、台湾国立清華大学人文社会学院教授で歴史研究所所長にして台湾の最高学術研究機関である台湾中央研究院院士の黄一農教授を招聘

して、2010年2月23日午後3時より“Cultural interaction between East and West”と題して講演会を開催した。

黄教授は講演で、「天主」、「火炮」、「妾」をキーワードに、16–17世紀の中国におけるキリスト教の伝来を例にとり、西欧文化の導入とその受容に関連する文化接触の問題

を取り上げた。

明朝中国へキリスト教が、西欧において開発されていた最新の大砲技術とともに伝来した。その上で、この大砲技術が呉郷之変（1631年）においてポルトガル軍に支援され砲兵隊を束ねていた明の將軍孔有徳が清軍に降伏することで最終的に明朝の終焉を決定づけたとする。さらにこの孔有徳の隊の多くはカトリックであったとし、キリスト教が中国の歴史に与えた影響を、技術的および文化的側面から明らかにする。当時中国におけるキリスト教は、特に政府・軍事エリート層を中心として大きな影響力を行使するに至っていたが、その受容において文化的障壁も存在して



いた。中でも社会的に地位のある人物が「妾」をとるといふ儒教的習慣は、家制度の存続を支える重要なものであったが、一方でキリスト教においては一夫一婦制が基本であって、婚姻概念の文化的相違がキリスト教の中国伝播に厳然として立ちまだかっていたと主張す



る。多くの知的エリートはキリスト教に改宗するものの蓄妾の習慣は捨てなかったが、キリスト教と儒教の相異なる要請の間で苦悩した王徴らの例もあり、中国におけるキリスト教は、特に第一世代の信者においては「儒教化したキリスト教」という特徴を持つようになる。

講演の後半は、映画の脚本のように王徴という人物に焦点を当てたもので、中国史を専門としない聴衆の興味も喚起するものであった。質疑応答では講演内容について歴史研究者から専門的な質問があり、黄教授からは根拠となる資料が示されるとともに資料が不足しているという研究状況の説明があった。

（文責：重見晋也）



オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラムでは21世紀 COE プログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバル COE が名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバル COE オフィスで、「テキスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などは Web サイトでお知らせしています。本号では2010年1月以降に開催した2回の要旨を紹介いたします。

第24回

インドネシアのテレビ放送に見る記号、再帰性、真の民族人格性 ……

ゼーン・ゴーベル 准教授（名古屋大学大学院文学研究科・言語学）

2010年1月13日 18時—19時

オープンレクチャーでは、言語人類学とメディア研究における互いに関連した4つの流れに依拠して、インドネシア人のある集団がどのようにしてインドネシアのテレビドラマに関わりを持ち始めるのかを検証した。特に理論的に関係するのは、記号論に関する Asif Agha の研究、それ

を時間的尺度と結び付けて用いた Stanton Wortham、アイデンティティと「問主観性の駆け引き」についての Mary Bucholtz と Kira Hall の研究である。ここでは、2つの視聴セッションと視聴後の5人のインドネシア人からなる集団に対するインタビューを記録した音声・映像データに焦点

を置いている。これらのセッションは2週間の期間にわたって実施されたものである。データの分析において、私はセッション中に行われた会話が持つ2つの興味深い特徴を強調した。第1に、再帰的な会話あるいはAghaの言う「メタ記号的論評」を通して、参加者が表象された記号の使用を認証し、脱順応化する（Bucholtz & Hall (2004) 参照）上で、どのように広く流布する民族的アイデンティティの記号を認識する能力を用いているかを示した。第2に、それらの論評が参加者自身の社会的同定においてどのように重要性を担うかを示した。この際特に、あるメンバーの論評が自身のスダ語母語話者としてのアイデンティティを時間・空間を通して凝集させる上で持つ重要な意味を取り上げた。それはある意味で、母語話者に対する彼女自身の位置付けと、テレビドラマに見られる人物のそれとを認証するものである。同じく重要なことは、その正しさまたは欠如についてこれらの論評を行う他の何人かは、論評の対象となる民族集団の成員として分類され得ないことであ

る。確かに、自分たちがスダ語を解さずその能力も無いとそのうち一人が明示的に述べているが、にもかかわらず、彼らは続いてスダ人の民族性の記号に対する理解力を、それを認証し脱順応化することで示している。



引用文献

- Agha, Asif. 2007. *Language and Social Relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bucholtz, Mary and Kira Hall. 2004. Language and Identity. In Alessandro Duranti (ed.), *A Companion to Linguistic Anthropology*. Oxford, UK: Blackwell. 369-94.
- Wortham, Stanton. 2006. *Learning Identity: The Joint Emergence of Social Identification and Academic Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

第25回

歴史の終わりの問題性について

ローラン・ビバルル 教授 (エセック経済商科大学院大学、通称ESSEC)

2010年2月10日 18時—19時

フランシス・フクヤマの著作によって「歴史の終わり」は人口に膾炙するようになった。フクヤマは、ロシア生まれのヘーゲル研究者であったコジェーヴを参照しながら、ベルリンの壁の崩壊とともに訪れた冷戦の終焉によって、これまでの世界の歴史の原動力ともなってきたイデオロギー対立や階級闘争が基本的には終焉し、もはやそうした大問題の消滅したポスト歴史の時代に人類は入った、と説く。自由民主主義の法治国家を越える理念はもはや存在せず、この国家の下で諸個人は皆みずからの個性において平等に承認されるからである。コジェーヴは、ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法を世界史に適用して、主人とは動物と違って、自らの名誉や尊厳のために命を賭す存在であり、奴隷は自らの生物学的生命のために死を回避し延命を図る存在であるが、人間の歴史は主人と奴隷の認知を求める闘争の歴史であったと考える。個人が市民として普遍的に承認

し合う法治国家が登場すると、この闘争の原動力であった主人と奴隷の弁証法は姿を消してしまう。その結果出現するポスト歴史においては、もはや言うべきことはなく、なすべきことは既になされている。何故なら各人は既に、自動的に、普遍的に認知されているからである。しかし、この無意味が跳梁するポスト歴史においてこそ、人間は自らの生の誕生とその可能性の極限をめぐる自意識にはじめて目覚めるのではないだろうか。



(文責：松澤和宏)



グローバル COE 研究員 ブリーフィング ⑧

グローバル COE ポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテキスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバル COE オフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

内田智秀 ● ベルギーは文学にいかなる影響をおよぼしたか——国民と民族の狭間で

本ブリーフィングでは、創作活動が本格化する前にメーテルランクが文学、絵画について記した『青いノート』を19世紀ベルギーの歴史コンテキストに照らして考察した。独立から半世紀しか経っていない歴史の浅いベルギーでは、フランス文学との関係で、ベルギー独自の文学を目指そうと、多くの作家がフランデレン地域色の強い題材を用いて創作していた。このようなコンテキストの中でメーテルランクも国家で分けず、「ゲルマン的性質 (Germanisme)」、「ラテン的性質

(Latinisme)」と独自の民族的視点で、文学、絵画を考察している。彼はベルギーをフランデレン地域やドイツと同じゲルマン的性質を有する国家とし、ゲルマン民族特有の物質と交感できる点を強調し、ラテン的性質を有するフランスとの違いを示した。さらにイギリス、アメリカの芸術もゲルマン的性質を有するとし、自然や魂との交感に彼は注目した。この民族的視点による芸術論は、その後のメーテルランクの文学、哲学の基調をなす。

小澤 実 ● 記憶と歴史叙述——ブレメンのアダム『ハンブルク司教事績録』の証言を通じてみるゴーム老王

本報告では、イェリング王朝開祖ゴーム老王 (-958) の活動を記録したブレメンのアダム『ハンブルク司教事績録』(1070年)のテキスト分析の一部を提示した。

まずは、分析対象である『事績録』で確認されるゴームの記述箇所の特徴をあげた。結論は三つある。ひとつは『事績録』は、ハンブルク大司教座が首都大司教座への昇格を目指すためのプロパガンダ的要素を備えている点である。二つ目は、ゴームの記述が組み込まれている「ウンニの事績」において、ゴームはウンニに敵対者という役割

を担わされているにすぎないことである。三つ目は、アダムのゴームに関する情報は、「あるデーン人の司教」からの伝聞に基づく点である。

以上を踏まえて、アダムの北欧に関する情報源であるデンマーク王スヴェン・エストリズセンの記憶に注目した。結論をかいつまんで言えば、アダムはスヴェンと「あるデーン人の司教」から異なるデンマークの歴史を聞き及んでいた。なぜ、デンマークの過去の歴史をめぐる両者の記憶は異なってしまったのかというのが現在の課題である。

杉山奈生子 ● アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画と会話文化——文化的コンテキストからの図像テキスト解釈

フランスの画家アントワーヌ・ヴァトー (1684-1721) が創始した雅宴画は、神話や聖書等を題材とした物語画 (歴史画) と異なり、文学的典拠に乏しく、彼に関する一次資料が比較的少ないことから、明確な主題解釈は困難であるとされてきた。本報告では、ヴァイダルの著書 (Mary Vidal, *Watteau's Painted Conversations: Art, Literature and Talk in Seventeenth-and Eighteenth-Century France*, 1992) を手がかりに、新たな解釈への展望を提示する。当時新しく確立した会話文学を傍証として、ヴァトーのあらゆる作品の主題を会

話 (conversation) とした彼女の主張は、拡大解釈の感は否めないが、一部の雅宴画には適用可能であると考えられる。特に、「些細なことを高貴なマナーで話す」と会話の作法書で語ったスキュデリ嬢の言葉は、伝統的な物語画の高貴な主題ではなく、当世風の男女の愛の営みを優雅に表象したヴァトーの雅宴画のモードに通じており、会話文学やサロン文化というコンテキストから雅宴画を解釈することへの妥当性を裏付けるものである。

朝鮮王朝期古地図研究に関わる文献収集

池内 敏

2010年2月22～24日、韓国国立中央図書館
 昨年9月にプラハ・カレル大学で開催された国際研究集会で「于山島考」という題目で研究報告を行いました。その後、一部内容修正をして、同年11月に韓国海洋水産開発院主催の国際シンポジウム「独島と海」でも「于山島考」という研究報告を行いました。二つの報告と討論を踏まえて、さらに補訂したものが近くプラハ国際研究集会報告書に掲載される予定です。ここで検討しているのが、朝鮮古地図に特徴的に

現れる「于山島」なる島が、朝鮮半島周辺に現存する島のいずれに該当するか、です。韓国では「于山島」を今日の「竹島/独島」に当てはめて考える傾向にありますが、拙論ではそうした見解に懐疑的です。今回ソウルの国立中央図書館で行った調査は、この議論およびこの議論と密接に関わる問題群に言及した韓国人による最新の研究成果や関連文献を入手してきたものです。

(事業推進担当者・日本史学)

パリにおける日本研究センター (INALCO) での活動

高橋 亨

2010年3月21日～29日
 今回のもっとも主要な目的は、寺田澄江氏が中心となり INALCO の『源氏物語』研究グループが主催した『源氏物語』と女性日記』という研究集会に参加することであった。その準備や打ち合わせの後、2010年3月27日に、エコール・ノルマルを会場として、「対論」という形式のシンポジウムが行われた。まず、私が「〈紫式部〉の身と心の文芸」という発表を行い、そのディスカッサントとしてお伽草子研究で知られ『蜻蛉日記』のフランス語訳も刊行しているジャクリヌ・ピジョー氏が関連の質問と報告をした。次に、カナダのプリティシュ・コロンビア大学のクリスティナ・ラフィン氏が「中世日記における『源氏物語』の読み」という発表をし、ディスカッサントはアラン・ロシェ氏であった。いずれも事前に原稿を送り、当日の参加者のためには、発表が日本語であったため、引用の原文と、そのフランス語訳を付した冊子が配布され、そのパワーポイントも用いられた。会場の参加者は50名ほどで、その後に参加者全員を含めた質疑応答が活発に進められた。そこでは寺田氏を含めた二人が通訳しつつ議論を進め、「身と心」をキーワードとして、王朝女性たちの境遇の変化に対応したその相克をエネルギーとしつつ、『源氏物語』の「浮舟」を主として継承した『とはず語り』などを含む女性日記の史的な展開を再検討する視座が明確となった。

この他、25日の午後には日本研究センターで「十二類歌合絵について」という講演を行った。そこではその背景となる「十二類歌合戦絵巻」のストーリーを説明し、十二支による時刻の組み合わせをふまえて、擬

人化された動物の絵と歌、そして名前をめぐるパロディ表現について、寺田澄江氏の通訳を交えた発表を行った。日本研究センターの学生に加えて、教員も含めて30名ほどの親密な集いで楽しかった。また、事前に貴重本の閲覧を申し込んで、パリ国立図書館では『異国物語』と『住吉本地』の奈良絵本と絵巻、ギメ美術館で『酒呑童子』『酒飯論』の絵巻、そして思いがけず『北野天神縁起絵巻』を見せていただいて新発見があったのも貴重な成果であった。

(事業推進担当者・日本文学)



エンニウスの“tria corda” (三つの心) の解明のための調査

小川正廣

2010年3月14～24日、イタリア中南部で歴史遺跡と文学テキストの関連に関する調査を行なった。アウルス・ゲリウス『アッティカの夜』17.17によると、南イタリア出身でローマ共和政中期の最大のラテン作家「エンニウスは、ギリシア語とオスク語とラテン語を話せるので、自分は『三つの心』を持っているのだとよく言っていた」と伝えられる。この言葉のポイントは、もちろん、エンニウスの誇った事柄がたんなる異なる三言語の運用能力ではなく、むしろ三言語の運用に内在する三種の文化の同化と併用だということである。今回の調査では、このエンニウスの「三つの心」の意味を歴史的背景との関連で解明するために、イタリアでギリシア語とオスク語が話されていた地域に存在する古代遺跡を訪問した。

今回ギリシア語・オスク語圏で訪れたのは、アナーニ、フェレンティーノ、アラトリ、アルピーノ、アクィーノ、カシーノ、カプア、ベネヴェント、サエピナム、スコラクウム、カウロニア、ロクリ、レージョ・ディ・カラブリア、ロザルノ、ヴィーボ・ヴァレンティア、ミノリ、ポンベイ、スタビア、ボスコレアーレの19の遺跡・考古学博物館と土地である。このうちカシーノ、カプア、サエピナム、カウロニア、ヴィーボ・ヴァレンティア、ポンベイでオスク語の碑文等の具体的

資料に接することができた。とくにポンベイでは、出土したオスク語の碑銘はローマ化以前のものが大部分だとはいえ、しかしその一部が西暦79年のヴェスヴィウス山噴火時まだ公的に活用されていたこと、また噴火時の壁の落書き (graffiti) にも、ラテン語とギリシア語に混じってオスク語が用いられたことを確認することができた。つまりポンベイでは、ローマ帝政初期でもオスク語がなお一般に通用していたのである。そして、もちろんポンベイは超例外的に保存状態のよい遺跡であり、その事例はまったく氷山の一角にすぎない。

ポンベイの事例は、「ローマ化」という現象の内実を垣間見させる。それは征服にともなう被征服民の完全な従属と従来のアイデンティティの喪失を意味するのではなく、ローマ文化と既存の文化との共生・複合による新たな、そしてより「大きな」アイデンティティの創出であろう。愛国的な叙事詩とともにさまざまなラテン劇を創作したエンニウスは、それがローマ化の真相であり、それを「心」に体現する自分こそ真のローマ人だと主張したのではないか。限られた範囲の調査だったが、そこから開き見た展望は大きい。

(事業推進担当者・西洋古典学)

グローバル COE 大学院説明会の開催報告

2010年4月7日15時より2010年度に入って第1回目となるグローバルCOE 大学院説明会を開催した。説明会は拠点リーダーである佐藤彰一



教授の挨拶に始まり、佐藤教授よりグローバルCOEの理念と現状が示されると共に、博士課程後期課程学生への研究意欲に対する強い期待のことがあった。続いて2009年度グローバルCOE論文賞受賞者への授賞式が執り行われた。既にNewsletterで発表されたように、昨年度は笠井俊和氏とEmilie

BORDENAVE氏の2編の論文が採択され、グローバルCOEの研究論集『HERSETEC』に掲載され顕彰されている。



大学院説明会では、本年度より内容がリニューアルされたグローバルCOE 授業科目について重見准教授より説明があった。「テキスト布置解釈学原論」と「テキスト布置解釈学各論」は2008年度より開講され、博士課程後期課程学生が課程博士論文を提出する条件として課されており、テキスト種別ごとに「歴史」「文学」「言語」「現代」の各テーマで開講されていた。必須科目であることには変わりがないものの、今年度より「テキスト布置解釈学各論」についてはテーマ設定を、「テキスト布置解釈学」により即した内容にし、「各論Ⅰ：解釈学的循環」「各論Ⅱ：テキスト布置」「各論Ⅲ：メタテキスト」「各論Ⅳ：パラテキスト」「各論Ⅴ：コンテキスト」として開講することになっている。授業はすべて既存のディシプリンを超えた複数の教員が担当しており、本プログラムが標榜する「テキスト布置解釈学」の方法論的可能性を示唆するものとなっている。

大学院学生海外派遣事業については、笠井俊和氏から、同事業が博士課程後期課程学生の研究活動に果たす役割の重要性について、自身の経験を元に講演があり、参加した学生一同、志を新たにしていた。

大学院説明会に先立つ行事が延長された影響で、予定されていた時間の半分程度と非常に限られた時間での開催となった説明会であったが、説明会終了後に多くの院生から積極的な質問が多数寄せられたことは嬉しい限りであり、本年度以降のプログラム推進にあたって大きな力となることを予感させるものであった。



大学院学生海外派遣事業の募集について

グローバルCOEでは、「大学院学生海外派遣事業」の募集を年2回行い、博士課程後期課程の学生に対して、課程博士論文の執筆に必要な海外での調査を支援しています。募集に際して博士論文執筆計画および海外調査計画を提出してもらい、グローバルCOE 学術委員会の下に設けられた選考委員会で応募書類を審査し、さらに面接を実施して支援する海外調査を決定しています。2010年度の募集も次の日程で2回行うことを予定していますので、ふるってご応募ください。募集の詳細はグローバルCOEのWebサイト(www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp)でご確認ください。

- 第1回** | 受付期間：2010年4月26日(月)～5月7日(金)
1次審査結果発表予定：2010年5月14日頃
2次審査結果発表予定：2010年5月21日頃
- 第2回** | 受付期間：2010年9月28日(火)～10月5日(火)
(予定) | 1次審査結果発表予定：2010年10月13日頃
2次審査結果発表予定：2010年10月20日頃

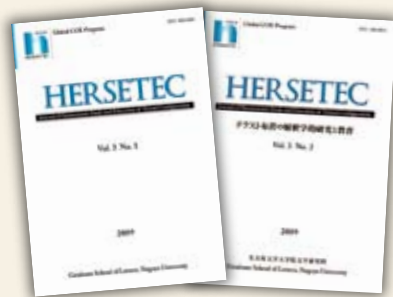
グローバル COE 論文賞の募集について

グローバルCOEでは学術論文を募って選考を行い、優秀な論文に対して「グローバルCOE論文賞」を授与するとともに、グローバルCOEプログラムの研究論集『HERSETEC』に掲載して顕彰しています。2010年度も『グローバルCOE論文賞』の募集を下記の要領で行います。課程博士学位請求論文に向けた日頃の成果を披露してください。

- 第1回** | 受付期間：2010年8月30日(月)～9月6日(月)
結果通知：2010年9月下旬(認定論文×切：2010年8月31日)
- 第2回** | 受付期間：2011年2月17日(休)～2月24日(休)
(予定) | 結果通知：2011年2月末(認定論文×切：2011年2月18日)

グローバル COE プログラムの刊行物

グローバルCOEプログラムの研究論集『HERSETEC』Vol.3が刊行されています。『HERSETEC』Vol.3は欧文篇・和文篇の2篇からなり、欧文篇には平成21年度グローバルCOE論文賞受賞論文2編も掲載されています。希望者には文学研究科グローバルCOE事務局(文学部講義棟131室)で配布していますので、お立ち寄りください。



グローバル COE のメール・マガジンの配信について

グローバルCOEでは、開始当初からプログラムの活動を広く博士課程後期課程の大学院生に知らせることを目的としてメール・マガジン『GCOE NEWSLETTER』を配信しています。メール・マガジンの受信を希望する場合には、メールを受け取りたいメール・アドレスから次のアドレスに宛てて空メールを送信してください。

gcoe_infos-join@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp